

---

# 遊戯王GX～モンスター・マスター～

天村 小無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX〈モンスター・マスター〉

### 【Nコード】

N5709I

### 【作者名】

天村 小無

### 【あらすじ】

初めまして、作者の天村小無といます。

この作品は、アニメ版『遊戯王GX』を元にしたクロスオーバー小説です。

最強オリ主や多数のオリジナルカードが登場しますが、そんな作品でも良いと言う方は読んでみて下さい。

この作品は作者の処女作です。故に誤字や脱字、文法がおかしい時があるかもしれませんがご了承下さい。

## プロローグ：全ての始まり

名だたるプロデュエリストを輩出した町、童実野町。

今、この町では未来のデュエリストを育成する機関「デュエルアカデミア」の実技試験が行われている。

そして、その会場から少し外れた茂みの中を一人の少年が走っていた。

？「やつべ〜！ もう実技試験、始まつてるよ〜！！！」

少年の叫びは、このままこだますると思われたがそれに返事をする者がいた。

？《だから、もう少し速く行こうって言ったのに》

返事をしたのは少年の左肩に乗った水色の毛玉らしき物だった。

？「そんな事言っただって、まさか自分が乗る電車が事故で遅れるなんて思わないだろ！！！」

？《とりあえず今は、速く会場に行こう》

？《そうだな。唯でさえ、筆記でもデカイミスをしたんだからな。

このままだと確実に落ちるぜ》

そして、今度は右肩に乗っていた赤紫色の毛玉らしき物がニヤニヤと笑いながら喋った。

さて、そろそろ彼らの紹介をしよう。

走っている少年の名前は『天宮竜輝』、この物語の主人公である。そして、竜輝の両肩に乗っているのは彼の精霊で、水色の方が『わたぼう』、赤紫色の方が『ワルぼう』という。

因みに、ワルぼうが言っている筆記のデカイミスとは、解答欄を一段間違えて書いたことである（その後、急いで訂正したが時間が足りなかった）。

3

竜輝「そんな事はわかってるよ!!!...とどろやら、もうすぐゴールみたいだ」

竜輝はそう言って正面を見ると、受付係の人達が見えた。

しかし、受付係の人達はちょうど片づけを始めようとしていた。

その事に気づいた竜輝は一気に加速し、茂みから飛び出した。

竜輝・?」「まった〜!!」「」

？「受験番号1110、遊戯十代」

竜輝「受験番号120番の天宮竜輝」

竜輝・十代「セーフだよな（だよね）？・・・えっ？」

竜輝が飛び出した茂みから受付を挟んだちょうど向こう側からも声がかかり、そこから竜輝と同じ年くらいの少年がこっちを見ていた。

これがこの物語の主人公『天宮竜輝』と原作の主人公『遊戯十代』の最初の出会いだった。

プロローグ：全ての始まり

？「ふう〜」

試験を終了したらしき眼鏡の少年『丸藤翔』、どうやら結果がよくなかったのか溜息をついている。その傍に竜輝と十代がやって来た。

十代「おっ、やってるやってる」

竜輝「どれどれ、へ〜」

受付を済ました二人はここまでくる途中、お互いの自己紹介をして友達となっていた。

そして決闘場では、一人の少年、受験番号1番の『三沢大地』が実技試験を受けていた。

その後、三沢は自身の『ブラッド・ヴォルス』に罫カード『破壊輪』を発動しデュエルに勝利した。

十代「あの1番見事なコンボだったな」

翔「そりゃそうさ。受験番号1番。つまり、筆記試験第1位の三沢君だよ」

十代の感想に翔は呆れたように言った。

十代「ふうん、受験番号はそういう意味か」

翔「合格は筆記の成績とデュエルの内容で決められるんだ。デュエルには何とか勝ったけど、受験番号119の僕が受かるかどうか心配すんな!」っあ」

十代はそう言って、不安そうな翔の背中を叩いた。

十代「運がよければ合格するさ。俺だつて110番だ！」

竜輝「デュエルに勝てたんならたぶん大丈夫だろ。ちなみに俺は120番だったな」

翔「君達も受験生？」

竜輝・十代「「ああ」「」

翔「でも、100番台のデュエルは1組目でとっくに終わってるよ」

十代「えっ、うそ!？」

自分の試験が既に終わっていると聞き十代は焦るが、竜輝は落ち着いていた。

竜輝「まあ、遅刻した理由は正当なものだし、ここに通されたからたぶん大丈夫だろ」

十代「そっ、そうだよな！」

竜輝の言葉に十代は落ち着きを取り戻す。

そして、そこに試験から戻ってきた三沢がやって来た。

十代「すっげえ、強いなお前」

三沢「ん？ ああ」

十代の言葉に三沢は特に反応を示さず答えた。  
しかし、次の十代の言葉には反応した。

十代「今年の受験生で“2番目”ぐらいに強いかもな」

三沢が十代の言葉の意味を聞こうとした時、アナウンスが流れた。

アナウンス『受験番号110、遊戯十代君』

十代「よしっ、俺の番だ！」

そう言って、十代は決闘場に向かおうとするがそれを三沢が呼び止めた。

三沢「君、何故僕が2番なんだ？」

十代「1番は俺だからさ」

十代は自信満々にそう言って、決闘場に向かうために再び歩き出した。

その後、十代はクロノスが召喚した『古代の機械巨人』を融合召喚した『E・HERO フレイム・ウィングマン』で倒し、デュエルに勝利した。

十代「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！！」

翔「いいぞ、110番！」

三沢「（良きライバルになれるかもしれないな、1番君）」

翔が声援を送り、三沢が十代をライバルと認めていたとき、またアナウンスが流れた。

アナウンス『受験番号120、天宮竜輝君』

竜輝「おっ、次は俺か」

竜輝は歩き始めたが一度止まり、三沢のほうを向いた。

竜輝「そうそう、三沢君」

三沢「んっ、何だ？」

竜輝「良きライバルは彼だけじゃないよ」

三沢「なっ！？ どういう」

竜輝「それじゃあ、行って来るね」

竜輝の意味深な言葉の意味を聞こうとしたが、その前に竜輝は先に行ってしまった。

会場にある観戦席の一角、そこに三人の少女がいた。

？「それにしても、さっきの人すごかったね」

？「そうだね。あれ？ また、受験生がきた・・・」

？「どうしたんや、フェイトちゃん？ 顔真っ赤やで？ おっ、今度のは結構カツコイイやん・・・もしかしてフェイトちゃん彼に惚れたん？」

？「えっ！？ ち、違うよ、はやて。ただカツコイイなあって」

？「そうだね。フェイトちゃんの言うとおり今度の方はカツコイイね。けどフェイトちゃ

ん、顔を真っ赤にしながら否定しても説得力ないよ？」

？「確かに、なのはちゃんの言うとおりやな」

？「うー」

3人の名前は『高町なのは』、『フェイト・テストロッサ』、『八神はやて』である。

そこに、一人の少女がやって来る。

？「随分楽しそうね。何を話しているの？」

フェイト「あつ、アッシュ。聞いてよ、二人が私のことをいじめるんだよ」

彼女の名前は『アッシュ・アルバード』、なのは達とは親友である。

はやて「別に、いじめてないやんな。なのはちゃん」

なのは「そうだね。本当のことを言っているだけだもんね」

アッシュ「ゴメン。まったく話が見えないんだけど」

はやて「実はな、今決闘場にいる子がカッコイイな〜って話してたんや」

アッシュ「へへ、どれどれ。たしかに、顔は良いわね。でも、デュエルの腕前はどうかしら？」

はやて「それは今から見るところや」

はやてがそう言って決闘場の方を見ると、十代と入れ替わりにやって来た竜輝がクロノスと相対していた。

クロノス「まさか、この私があんなドロップアウトボーイに負けるなんて、私の沽券に関わるノーネ。何としてでも、このボーイをコテンパンにして、立場を回復しないといけません」私はクロノス・デ・メデイチ。学園では実技最高責任者をやってルーノです」

竜輝「受験番号120番、天宮竜輝です。よろしくお願いします」

そして、それぞれデッキから5枚ずつカードをドロウした。

竜輝「（結構いいカードが来たな）先攻後攻はどうしますか？」

クロノス「好きな方をあげルーノです」

竜輝「そうですか？ では先攻をもらいます」

そして、準備を終えた二人は同時に叫んだ。

竜輝・クロノス「デュエル！」

竜輝「俺のターン、ドロー！」

竜輝は自身のデッキからカードを一枚ドローした。そして、それを確認した瞬間固まってしまった。

クロノス「如何したノーネ？」

竜輝「すみませんがクロノス先生。この勝負、俺の勝ちです」

次の瞬間、会場が一気にどよめいた。

それはそうだろう。最初のターンでいきなり勝利宣言したのだから。

クロノス「なっ、何を言っているノーネ！ そんな戯言を言っている暇があったらさっさと進めるノーネ！」

竜輝「戯言ではないんですけどね。まあ、いいでしょう。俺は『DQM - とげぼうず』を攻撃表示で召喚」

DQM - とげぼうず

通常モンスター / 星2 / 地属性 / 岩石族

攻撃力400 / 守備力600

クロノス「ふんっ、そんな雑魚モンスターを召喚してどうするノーネ（しかし、見た事ないモンスターなノーネ）」

竜輝「雑魚モンスターと言って、侮っていると痛い目にあいますよ・  
・っで、もうすでにあってましたね」

竜輝の挑発とも取れる言葉にクロノスは額に青筋を浮かべた。

竜輝「さて、俺はさらに速攻魔法『なかまをよぶ』を発動。このカードは自分フィールド上に存在するレベル3以下の通常モンスターを一体指定し、そのモンスターと同名のカードを一枚、自分のデッキから自分フィールド上に攻撃表示で特殊召喚する。来い、『とげぼんず』！」

なかまをよぶ

速攻魔法

自分フィールド上に存在するレベル3以下の通常モンスターを一体指定する。

そのモンスターと同名のカードを一枚、自分のデッキから自分フィールド上に攻撃表示で特殊召喚する。

竜輝のフィールドに2体目の『DOM・とげぼんず』が現れる。

竜輝「そして、永続魔法『星降りのほこら』を発動。このカードの効果は自分フィールド上にある特定のモンスターを2体墓地に送ることにより、自分のデッキもしくは自分のエクストラデッキからモンスターを特殊召喚する事ができる」

星降りのほこら

永続魔法

このカードは他のカードの効果では破壊されない。自分フィールド上にある特定のモンスターを2体墓地に送ることにより、自分のデッキもしくは自分のエクストラデッキからモンスターを特殊召喚する事ができる。

クロノス「なつ、そんなカード聞いた事ないノーネ!？」

竜輝「俺は2体の『とげぼうず』を墓地に送り、デッキから『DQM - ばくだんいわ』を攻撃表示で特殊召喚する！」

DQM - ばくだんいわ

効果モンスター / 星5 / 地属性 / 岩石族

攻撃力1800 / 守備力2300

「星降りのほこら」の効果で2体の「DQM - とげぼうず」を墓地に送ることで特殊召喚することができる。

炎属性のモンスターと戦闘した時このカードを破壊し、フィールド上の全てのモンスターに対してコイントスを1回ずつ行い、裏が出たらそのモンスターを破壊する。

翔「すごい、1ターン目から上級モンスターを召喚するなんて」

三沢「しかし、何故守備力の高いモンスターを攻撃表示で召喚したんだ？」

翔は竜輝の腕前に驚き、三沢は守備力の高いモンスターを何故攻撃表示で召喚したのかに疑問を持った。

クロノス「ふんっ、1ターン目から上級モンスターを召喚した事は凄いです、ボーイは初歩的なミスを犯したノーネ。守備力の高いモンスターを攻撃表示で召喚するなんてナンセンスなノーネ」

竜輝「いえ、別にミスなんてしてませんよ。だって、守備表示にできなかったのではなく守備表示にする必要が無かったですからね」

クロノス「ど、どどういう事なノーネ？」

竜輝「教えてあげますよ。あなたの敗北と共にね。俺は魔法カード『メガンテ』を発動。このカードは自分フィールド上にいる岩石族モンスターを一体破壊し、お互いにその守備力分のダメージを与える」

メガンテ

通常魔法

自分フィールド上にいる岩石族モンスターを一体破壊する。  
お互いにその守備力分のダメージを受ける。

竜輝がカードを掲げた瞬間、『DQM - ばくだんいわ』が紅く光り始めた。

クロノス「なつ、そんな事していったい何の意味が・・・」

竜輝「意味ならありますよ。このカードを使う事によって、『メガンテ』の発動にチェインして速攻魔法『マホカント』を発動。  
このカードが発動した後、自分が対象となった魔法カードが発動した場合、その効果を相手に与える。つまり、どうなるかわかりませんよね」

マホカント

速攻魔法

このカードが発動した後、自分が対象となった魔法カードが発動した場合、その効果を相手に与える。

竜輝は右手をクロノスに向けた。

竜輝「楽しいデュエルでしたよ。クロノス先生」



君」

翔が十代の時と同じように声援を送り、三沢もまた十代と同じように竜輝をライバルと認定していた。

アッシュ「へへ、やるじゃない彼」

なのは「そうだね。まさか1ターンキルで、あのクロノス先生を倒すなんて」

はやて「くく、顔が良くて、デュエルも強いなんてまさに優良物件やね」

なのは「はやてちゃん、優良物件って・・・」

フェイト「そうだよ、はやて。彼は物じゃないよ」

アッシュ「フェイト、そう意味じゃないから」

フェイト「へっ?」

なのは達とは別の場所から竜輝を見ている二人の男女がいた。女の方は『天上院明日香』。男の方は『丸藤亮』という。

明日香「すごい、クロノス教諭を1ターンキルで倒すなんて」

亮「ふっ、今年は生きがいい1年が入ってきそうだな」

大声援が響く中、竜輝は一つ息を吐いた。

竜輝「ふう、これでやっと彼らと共に物語を進められる・・・」

竜輝の呟きは声援に紛れ、誰にも聞こえることはなかった。

## 舞台裏1：第1回座談会

コム「どうも、この小説の作者天村小無こと、コムです」

竜輝「この小説の主人公、天宮竜輝だ。ところで作者、ここは何だ？」

コム「ここは、本編では語れなかった事や語りつくせなかった事を、ゲストを招いて話す場所です」

竜輝「ふん、じゃあ俺は最初のゲストということか？」

コム「そうですね」

竜輝「で、今回は何を話すんだ？」

コム「そうですね、今回はデュエルの裏話とオリジナルカードの説明をしましょうかね」

竜輝「裏話？」

コム「ええ、今回のデュエルの勝ち方は2つの案があったんですよ」

竜輝「それは？」

コム「まず1つ目は、今回のような1ターンキルで勝つ方法。2つ目はクロノスが召喚した『古代の機械巨人』を倒して勝つ方法です」

竜輝「何故、1キルの方を選んだんだ？」

コム「後者の方は、十代君が既に行っているのかぶるのは面白くないかなと思ひまして。それに、そうするとデュエルが長引きそうだったので」

竜輝「別に長引いても良いんじゃないか？」

コム「うーん、最初のデュエルはなるべく速く、そして印象的な勝ち方をしたかったので今回のようなデュエルにしました」

竜輝「それにしても、反則過ぎじゃね？」

コム「まあ、若干やってしまった感が無くもないですが、どっちにしろ今回のような1キルで勝つというやり方はたぶんもうでないでしょう」

竜輝「たぶんなんだ」

コム「ええ。さて、そろそろオリカの説明をしましょうかね」

竜輝「そうだな。それじゃあ、まずは『DQM・とげぼうず』」

DQM・とげぼうず

通常モンスター／星2／地属性／岩石族

攻撃力400／守備力600

コム「『DQM・ばくだんいわ』を召喚するために作ったカード、

以上」

「竜輝「そんな、身も蓋もない。まあ、いいか。次は『なかまをよぶ』」

なかまをよぶ

速攻魔法

自分フィールド上に存在するレベル3以下の通常モンスターを一体指定する。

そのモンスターと同名のカードを一枚、自分のデッキから自分フィールド上に攻撃表示で特殊召喚する。

コム「これも、『DQM - ばくだんいわ』を召喚するために作ったカード、以上」

竜輝「でも、このカードは他に使いそうじゃね？」

コム「ええ、これからも機会があれば使おうと思っています」

竜輝「ふうん、じゃあ次は俺のデッキのキーカード『星降りのほこら』だ」

星降りのほこら

永続魔法

このカードは他のカードの効果では破壊されない。

自分フィールドにある特定のモンスターを2体墓地に送ることにより、自分のデッキもしくは自分のエクストラデッキからモンスター

を特殊召喚する事ができる。

コム「竜輝のデッキに無くてはならないカードです」

竜輝「そうだな。というか、このカード破壊不可能だったんだな」

コム「ええ、君のデッキのキーカードですから、破壊されたら困りますからね」

竜輝「でも、除外は有効なんだな」

コム「実は、その事の後から気づいたんですけど、除外まで無効にしたら不味いかなと思って、そのままにしました」

竜輝「さて次は、今回のデュエルを勝利に導いた3枚のカードを紹介するかな。まずはこれ『DQM - ばくだんいわ』」

DQM - ばくだんいわ

効果モンスター / 星5 / 地属性 / 岩石族

攻撃力1800 / 守備力2300

「星降りのほこら」の効果で2体の「DQM - とげぼつず」を墓地に送ることで特殊召喚することができる。

炎属性のモンスターと戦闘した時このカードを破壊し、フィールド上の全てのモンスターに対してコイントスを1回ずつ行い、裏が出たらそのモンスターを破壊する。

コム「おそらく、今回限りの登場になると思われるカードです」

竜輝「そうなのか？」

コム「ええ。一応ばくだんいわらしく、誘爆効果もつけてみましたが、たぶんこの効果が発動する事はないでしょう」

竜輝「下手したら、自分だけに被害が出ることがあるからな。それじゃあ、次はこれ『メガンテ』」

メガンテ

通常魔法

自分フィールド上にいる岩石族モンスターを一体破壊する。  
お互いにその守備力分のダメージを受ける。

コム「『破壊輪』の守備力バージョンです。これもたぶん、今回限りの登場です」

竜輝「まあ、『破壊輪』と違って、自分のそれも岩石族モンスター限定だからな」

コム「ええ、それに罠カードの『破壊輪』と違い、通常魔法のこれは相手のターンで発動する事も出来ませんし」

竜輝「だな。さて、最後は『マホカント』だ」

マホカント

速攻魔法

このカードが発動した後、自分が対象となった魔法カードが発動した場合、その効果を相手に与える。

コム「今回の1キルの要のカードだね」

竜輝「かなり使えそうなカードだな」

コム「これもこれから機会があれば使おうと思っているカードです」

竜輝「とりあえず、今回登場したカードは全部紹介したな」

コム「そうだね。今日のところはこの辺でお開きに《《ちよっと、待った（待て）——！！》》」

竜輝「わたぼうにワルぼうじゃないか。如何したんだ？」

わたぼう《『如何したんだ？』、じゃないよ！》

ワルぼう《俺らの出番が冒頭のたった数行しか無いじゃねえか！》

コム「ああ、ゴメン。他の登場人物を書いていたら、君達のスペースが無かったんだよ。それにこれからもこんな感じだと思うよ」

わたぼう《ちよっと！ それ本当ですか！？》

コム「うん。デュエルに出せたら、もう少し出番が増えるけど、君達じゃねえ」

竜輝「そういえば、『星降りのほこら』の効果で特殊召喚できない

な」

コム「それに君達の立場上、効果モンスターにしなければいけないんだけど、その効果が思いつかないしね」

ワルぼう「そこを何とかするのが、作者の腕の見せ所じゃねえのかよ！」

コム「そもそも、僕は君達をマスコットキャラとして扱うつもりだったからね。だから、これ以上の出番を与えるのは難しいね」

わたぼう・わるぼう「そんなあ」

コム「まあ、なるべく出せる様にがんばるよ。それじゃあ、今度こそお開きということまで、じゃあねえ」

## 主人公設定

名前：天宮あまみや 竜輝りゅうき

年齢：十代達と同じ。

容姿：やや中性的な顔で、長い髪を首の後ろ辺りで結わえている。

性格：冷静沈着だが、キレるとかなり怖い。たまにうっかりをする。

学年：オシリスレッド1年

使用デッキ：DQMをメインにしたデッキ（中身はちよくちよく変わっている）

精霊：わたぼう・ワルぼう

この物語の主人公。自称神の勧めで、自分が二次創作で作ったカードや精霊達と共に『遊戯王GX』の平行ワールドに飛ぶ。

第1話・ある意味本当のプロローグ（前書き）

今回、デュエルはありません

## 第1話：ある意味本当のプロローグ

デュエルアカデミアは太平洋の孤島に設置されている。秋から始まる新学期の備え、狭き門を通り抜けた新入生達が続々と集まっていた。

そして、デュエルアカデミアに向かうへりの中で、竜輝は首から提げたペンダントを弄りながら物思いにふけっていた。

竜輝「（いよいよ、物語の始まりだな。しかし、自分がここに来る事になるなんて夢にも思わなかったな）」

竜輝はそんな事を考えながら少し前に起きた、出来事を思い出していた。

### 第1話：ある意味本当のプロローグ

ある日、竜輝が目覚めるとそこは白一色のみの空間だった。

竜輝「は？　ここはいったい何処だ？」

？「ここは時空の狭間という場所じゃ」

竜輝「え？」

竜輝が声のした方を向くと、そこには白いローブのような服を着た一人の老人がいた。

竜輝「あなたは？」

？「わしか？ わしはお主らで言うところの神と呼ばれるものじゃ」

竜輝「その神が俺にいつたいなんのようだ？」

自称神「おやつ？ 驚いたり疑ったりしないのじゃな」

竜輝「内心では結構驚いているし、あなたの言っている事をあまり信じていない。だが、今驚いても意味は無いし、最初からあなたの言っている事を全否定する証拠も無いしな。とりあえず、あなたの話を聞いてから判断する」

自称神「ほお、お主は聡明な様じゃな」

竜輝「別にそんなことは無いさ。で、何故俺はここにいる？」

自称神「それはわしが呼んだからじゃ」

竜輝「何故？」

自称神「お主に行って貰いたい世界があるんじゃ」

そう言うと、自称神は虚空から一枚のカードをだした。

竜輝には裏側しか見えないが、その模様は竜輝がよく知るものだった。

竜輝「それは、デュエルモンスターズのカード・・・ということは、俺に行つて貰いたい世界つて」

自称神「そう、お主に行つて貰いたい世界とは『遊戯王デュエルモンスターズGX』・・・の平行ワールドじゃ」

竜輝「『遊戯王デュエルモンスターズGX』の平行ワールド？  
本来の『遊戯王デュエルモンスターズGX』とどう違うんだ？」

自称神「基本的な流れはアニメ版と一緒にじゃが、色々な人物が介入してゐるから、中身は別物と言つても過言ではないの」

竜輝「色々な人物？」

自称神「まあ、簡単に言えば他の物語の登場人物が出てくる、クロスオーバーの世界となつてゐる」

竜輝「なるほど。で、何で俺なんだ？」

自称神「ふむ、いくつか理由があるの、1つはお主が天涯孤独の身ということ。お主が今の世界に未練が無い事。お主が『デュエルモンスターズ』を知っていることなど、他にもいくつかあるが、一番の理由はこれじゃな」

自称神は先ほど出したカードの表側を竜輝に見せた。

それを見た竜輝は驚愕の表情を浮かべた。

何故なら、自称神が持っているカードは本来、あるはずも無いカードなのだから。

そのカードとは……

竜輝「『星降りのほこら』だと……」

自称神「そうじゃ。お主がかつて、自分で考えたカードじゃ。ほれ、他にもあるぞ」

そう言つて、自称神が指を鳴らすと、二人の周りにかんりの数のカードが表れた。

それらの一部は、竜輝自身が考えたカードだが、他は竜輝も知らないカードだった。

自称神「わしが、お主を選んだ一番の理由はの、お主が考えたカードでこの物語に介入したらどうなるのか、気になったからじゃ。どうじゃ、行つてくれるかの？」

竜輝「……良いぜ。その世界に行つてやる」

竜輝は獰猛な笑みを浮かべながら返答した。

自称神「そうか。なら、お主にはいくつか贈り物をやるう。まずは、お主が考えたこれらのカードじゃな。一部はお主が考えたカードじ

やが、残りはわしが考えたカードじゃ。大事にしなさい」

再び、自称神が指を鳴らすと、周りに浮いていた全てのカードが一箇所に集まった。

自称神「次は精霊じゃな。ふむ、アレらがちょうどよからう」

自称神がもう一度指を鳴らす、

ポンッ、ポンッ。

2発の破裂音と共に水色と赤紫色の毛玉が現れた。

? 《初めまして、竜輝。僕はわたぼう》

? 《俺は、ワルぼう》

わたぼう・ワルぼう 《今日から君（お前）の精霊になるよ（だ）、よろしく（な）！》

自称神「そして、最後にこれをやる」

自称神は虚空からある物を取り出した。

それは、500円玉位の大きさのメダルが付いたペンダントだった。しかし、ただのペンダントではない。

それは・・・

竜輝「まさかと思いますが、それは『ロトの紋章』ですか？」

自称神「それをモデルに作ったアイテムじゃ。これを使えば、闇の力などに対抗する事が出来るじゃろ」

自称神は『ロトの紋章』を竜輝に渡し、竜輝はそれを恐る恐る受け取った。

竜輝「そんなに凄いアイテムなんですか？」

自称神「うむ、じゃがあまり多用しない方が良いで。それはお主の精神力を消費して力を発揮するからの」

竜輝「因みに、使いすぎるとどうなります？」

自称神「何、丸一日眠るだけじゃ。詳しい使い方はお主の精霊達に聞くと良い」

竜輝「わかりました」

自称神「さて、そろそろ向こうに送ろうと思うのじゃが、何か質問はあるかの？」

竜輝「そうですね。まずは、どの程度物語に介入していいんですか？」

自称神「そこら辺はお主の好きにしたら良い。必ず物語通りに進めなければいけないと言う訳では無いからの」

竜輝「住居や戸籍、それと資金は？」

自称神「住居や戸籍は今と同じものを用意しておるし、資金も十分に用意しておいた」

竜輝「向こうはどれくらいの時期なんですか？」

自称神「入学試験の半年ほど前じゃが問題ないか？」

竜輝「まあ、それぐらいなら問題ないですね」

自称神「他に何か無いかの？」

竜輝「はい、特には」

自称神「では、お主を向こうに送ろう」

次の瞬間、自称神の後ろに大きな白い扉が現れた。

自称神「この扉を潜れば、お主は向こうに行ける」

竜輝「わかりました。わたぼう、ワルぼう、行くぞ」

わたぼう・ワルぼう《《うん（あいよ）》》

竜輝が扉の前に行くと、扉は自動的に開き、中から眩い光を放っていた。

自称神「それじゃあ、竜輝君。楽しんできなされ」

竜輝「ああ、楽しんでくるよ」

そう言って竜輝は扉を潜った。

竜輝が潜り終わると同時に扉は閉まり、扉は消えた。

自称神「さて、彼が介入したあの世界は、どのような物語を歩むのじゃろうな」

十代「おい、竜輝！」

竜輝「ん？ 何だ十代」

竜輝が前を向くと十代が前の座席からこちらに覗き込んでいた。

十代「もうすぐ、デュエルアカデミアに着くつてよ」

竜輝「ああ、わかった」

十代「くく、楽しみだな。いったいどんなデュエリストがいるのか楽しみだぜ」

竜輝「そうだな。確かに、楽しみだな」

竜輝はそう言つて、窓から外を見た。

そこには、まだ距離があるが、小さい島が見えていた。

竜輝「（これから3年間。いったいどんな事が起こるんだろな）」

## 第1話：ある意味本当のプロローグ（後書き）

今回登場した『ロトの紋章』は、あくまで闇の力などの特殊な力に  
対抗する為のアイテムなので、護る事ぐらいにしか使用しないつも  
りです。

では、次回までさようなら。

追伸：今回、舞台裏はありません。

## 第2話：MONSTER VS HERO（前書き）

今回から登場する既存のカードの効果は、基本的にはOCG版の効果を採用していますが、原作・アニメ版の効果を採用しているときもあります。

## 第2話：MONSTER VS HERO

竜輝達新人生は島に到着したが、入学式までまだ時間があった。その為、竜輝が入学式まで何をしてよいか考えていた時、十代が話しかけてきた。

十代「お〜い、竜輝〜！」

竜輝「ん？ 何だ、十代？」

十代「入学式まで暇だよな！」

竜輝「ああ。だから今、それまで何して様か考えて・・・」

十代「なら、俺とデュエルしようぜ！」

竜輝「お前と？」

十代「そうそう！」

竜輝「別にいいぞ」

十代「ヨッシャ！ なら、さっそくデュエルをしようぜ！」

竜輝「了解」

そう言って、二人はデュエルディスクを取り出し、自分のデッキを

セットした。

竜輝・十代「デュエル！」

第2話：MONSTER VS HERO

十代「先攻は貰うぜ。俺のターンドロー！俺は『E・HERO  
フェザーマン』を守備表示で召喚。さらに、カードを1枚セットし  
てターンエンド！」

E・HERO フェザーマン

通常モンスター/星3/風属性/戦士族

攻撃力1000/守備力1000

竜輝「俺のターンドロー！俺は『DQM-グリズリー』を攻撃表  
示で召喚」

DQM-グリズリー

通常モンスター/星4/地属性/獣族

攻撃力1900/守備力800

竜輝「そして、『グリズリー』で『フェザーマン』を攻撃！」

『DQM-グリズリー』の攻撃力は1900、『E・HERO フェザーマン』の守備力1000を超えているため、『E・HERO フェザーマン』は破壊される。

十代「くっ！　だがこの瞬間、リバース罠『ヒーロー・シグナル』を発動！　このカード効果により、『E・HERO クレイマン』を守備表示で特殊召喚！」

ヒーロー・シグナル  
通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

E・HERO クレイマン  
通常モンスター/星4/地属性/戦士族  
攻撃力 800/守備力2000

竜輝「カードを1枚セットして、ターンエンド」

十代「俺のターン、ドロー！　俺は『E・HERO スパークマン』を攻撃表示で召喚。さらに、手札から魔法カード『融合』を発動！　フィールドの『クレイマン』と『スパークマン』を融合し、『E・HERO サンダー・ジャイアント』を融合召喚！」

E・HEROスパークマン

通常モンスター/星4/光属性/戦士族

攻撃力1600/守備力1400

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HERO サンダー・ジャイアント

融合・効果モンスター/星6/光属性/戦士族

攻撃力2400/守備力1500

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

十代のフィールドの『E・HERO クレイマン』と『E・HERO スパークマン』が空に昇り、代わりに『E・HERO サンダー・ジャイアント』が登場した。

「『サンダー・ジャイアント』の効果を発動！ 手札を1枚捨て、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。『グリズリー』の元々の攻撃力は1900。『サンダー・ジャイアント』よりも低い。よって、『グリズリー』を破壊！」

『E・HERO サンダー・ジャイアント』の効果により、『DQM・グリズリー』が破壊される。

十代「そして、『サンダー・ジャイアント』でダイレクトアタック！ ボルティック・サンダー！」

竜輝「くっ！」

竜輝 LP1600

十代「ターンエンドだ！」

竜輝「中々強いな、十代。このままでは、負けてしまいそうだ」

十代「へっ、全然そんな風には見えないぜ」

竜輝「俺のターン、ドロー。俺は『DQM・ドラゴンキッズ』を攻撃表示で召喚」

DQM・ドラゴンキッズ

通常モンスター/星2/炎属性/ドラゴン族

攻撃力900/守備力600

竜輝「さらに、通常魔法『黙する死者』を発動。甦れ、『グリズリ  
ー』！」

黙する死者

通常魔法

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。選  
択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊  
召喚したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限り攻撃  
する事ができない。

十代「竜輝のフィールド上にモンスターが2体、ということは一！」

竜輝「気づいたようだな、十代。永続魔法『星降りのほくら』を発  
動。俺は『グリズリー』と『ドラゴンキッズ』を墓地に送り、デッ  
キから『DQM・ストロングアニマル』を特殊召喚する！」

DQM・ストロングアニマル

効果モンスター/星6/地属性/獣族

攻撃力2300/守備力1800

「星降りのほくら」の効果で「DQM・グリズリー」1体と「DQ  
M」と名のつくドラゴン族モンスター1体を墓地に送ることです特殊

召喚することができる。

このカードは攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力を500ポイントアップすることができる。この効果を発動して、相手ライフに戦闘ダメージを与えた場合、このカードのコントローラーはその半分のダメージを受ける。この効果は自分のターンに1度しか使用できない。

竜輝「そして、『ストロングアニマル』で、『サンダー・ジャイアント』を攻撃。この時、『ストロングアニマル』の効果を発動。このカードは攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力を500ポイントアップすることができる。まあ、その代わりダメージを与えたら、その半分のダメージを受けるがな」

攻撃力が上がった『DQM・ストロングアニマル』の攻撃で『E・HERO サンダー・ジャイアント』が破壊され、十代にダメージを与える。

十代「ぐっ!」

十代 LP3600

そして、『DQM・ストロングアニマル』の効果で竜輝もダメージを受ける。

竜輝「くっ」

竜輝 LP1400

竜輝「ターンエンド」

十代「中々やるじゃねえか、竜輝。このままじゃ、俺が負けてしま  
いそつだぜ」

竜輝「お前もそんな風には見えないぞ。勝つ気満々って顔をしてい  
るぞ」

十代「当然！俺のターン、ドロー！よしっ、俺は『E・HER  
O バーストレディ』を攻撃表示で召喚。さらに魔法カード『ミラ  
クル・フュージョン』を発動！」

E・HERO バーストレディ  
通常モンスター/星3/炎属性/戦士族  
攻撃力1200/守備力800

ミラクル・フュージョン  
通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによっ  
て決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」と  
いう名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。  
(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

竜輝「なっ！ それは！」

十代「ミラクル・フュージョンは自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、『E・HERO』という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。俺はフィールドの『バーストレディ』と墓地の『フェザーマン』を除外する。来い！ マイ・フェイバリットカード『E・HERO フレイム・ウイングマン』！」

E・HERO フレイム・ウイングマン

融合・効果モンスター/星6/風属性/戦士族  
攻撃力2100/守備力1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

フィールド上の『E・HERO バーストレディ』と墓地の『E・HERO フェザーマン』が除外され、十代のフィールド上に『E・HERO フレイム・ウイングマン』が召喚された。

竜輝「『フレイム・ウイングマン』が召喚されたか。だが、『フレイム・ウイングマン』の攻撃力では俺の『ストロングアニマル』は倒せないぞ」

十代「竜輝、甘いぜ。ヒーローにはヒーローに相応しい戦う舞台があるんだぜ」

竜輝「ヒーローに相応しい戦う舞台”？ まさか！ 『摩天楼

- スカイスクレイパー - 『か！』」

十代「その通り！ フィールド魔法『摩天楼 - スカイスクレイパー - 』発動！」

摩天楼 - スカイスクレイパー -  
フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

十代がデュエルディスクに『摩天楼 - スカイスクレイパー - 』をセットした瞬間、周りから、ビル群が上昇してきた。

十代「このカードの効果は知っているよな。いくぜ、『フレイム・ウィングマン』で『ストロングアニマル』を攻撃！ スカイスクレイパー・シュート！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』が跳躍し、『DQM - ストロングアニマル』に突っ込んできた。

竜輝「このままなら、俺が負けてしまうな。そう、このままならな  
！ リバースカードオープン！ 速攻魔法『いてつく波動』！」

いてつく波動

速攻魔法

手札を1枚捨てて発動する。相手フィールド上の表側表示で存在す  
る全ての魔法・罫カードの効果を発動したターンの間無効化する。

竜輝「このカードは手札を1枚捨てる事により、相手フィールド上  
の表側表示で存在する全ての魔法・罫カードの効果を発動したター  
ンの間無効化する。つまり、『摩天楼 - スカイスクレイパー -』  
の効果を無効化！ よって、『フレイム・ウィングマン』の攻撃力  
は上昇しない！」

十代「なんだって！」

竜輝が手札を墓地に送ると突風が発生し、『摩天楼 - スカイスク  
レイパー -』の効果で現れたビル群が、まるで幻だったかのように  
掻き消えた。

そして、『DQM - ストロングアニマル』に突っ込んできた『E・  
HERO フレイム・ウィングマン』は返り討ちにあい破壊される。

十代「ぐっ、『フレイム・ウィングマン』！」

十代 LP3400

竜輝「クロノス先生のデュエルで、そのカードは見させてもらったからな。しつかり、対応させてもらったぜ」

十代「くっ（もう、モンスターは召喚できない。何としてでも、次のターンに繋げなくちゃ）俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

十代は手札からカードを1枚セットして、ターンエンドした。それと同時に、消えていたビル群が再び現れる。

竜輝「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『強欲な壺』を発動」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

カードの効果により、竜輝はデッキからカードを2枚ドローする。

竜輝「（よし、このカードなら）俺は手札から『DQM-おおめだま』を攻撃表示で召喚。さらに魔法カード『おたけび』を発動する。このカードは自分フィールド上のモンスターを1体選択し、この力

ードが発動したターンの攻撃を破棄する。そして、コイントスを行い表がでた場合、相手はこのターン魔法・罠カードを発動する事ができない。俺は『おおめだま』を選択する」

DQM - おおめだま

通常モンスター / 星1 / 地属性 / 悪魔族

攻撃力600 / 守備力500

おたけび

通常魔法

自分フィールド上のモンスターを1体選択する。選択されたモンスターはこのカードが発動したターン攻撃できない。コイントスを1回行い表が出た場合、相手はこのターン魔法・罠カードを発動する事ができない。

竜輝は懐からコインを取り出し、指で弾いた。

コインは宙を舞い、そして・・・

竜輝「結果は“表”。よって、このターン、お前は魔法・罠カードを発動できない！」

おおめだまが体を震わせて叫び、その叫びは十代に命中した。

十代「くっ！」

竜輝「そして、俺は手札から速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動。俺は『DQM - おおめだま』を生贄に捧げ、攻撃力を選択して攻撃力分のライフを得る」

神秘の中華なべ

速攻魔法

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

竜輝 LP1900

竜輝「さあ、これで終わりだ。『ストロングアニマル』でダイレクトアタック！ この時、『ストロングアニマル』の効果を発動！ ダメージステップの間攻撃力を500ポイントアップする！ さらに、速攻魔法『突進』を発動！ 『ストロングアニマル』の攻撃力をさらに700ポイントアップさせる！」

突進

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

竜輝の言葉に従い、強化された『DQM・ストロングアニマル』が十代に向かった。

それに合わせて、竜輝は右手を十代に向けた。

竜輝「とても楽しいデュエルだったよ、十代」

そう言つて、竜輝は右手の指を鳴らした。

それと同時に、『DQM・ストロングアニマル』はその強靱な前足を十代に振り下ろした。

十代「うわー！」

十代 LPO

十代「ちえっ、もう少しで勝てたのにな」

竜輝「たしかに、危なかったな。ちなみに十代、最後の伏せカードは何だったんだ？」

十代「『聖なるバリア・ミラーフォース』」

聖なるバリア・ミラーフォース・  
通常罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

竜輝「もし、『おたけび』が不発に終わってたら俺が負けていたかもしれないな」

十代「よし、竜輝。もう1度デュエルしようぜ！」

竜輝「そうしたいのはやまやまだが、もうすぐ入学式が始まる時間だぞ」

十代「あつ、本当だ。なら、その後にデュエルをしようぜ！」

竜輝「ああ、暇だったならな」

十代「約束だからな！」

竜輝「はいはい。それより、速く行こうぜ。このままだと、入学式に遅刻するぞ」

十代「そうだな。よし、行くか」

竜輝「ああ」

そして、二人は入学式へと向かった。



## 舞台裏2：第2回座談会

コム「こにゃにゃちは〜！ このネタがわかる人はいるかな？ この小説の作者天村小無こと、コム《ちよつと待った（待て）ー！ー！》《…え〜と、何ですか？ 今回のゲストのわたぼうさんに、ワルぼうさん」

わたぼう《前話のアレは何ですか！ 前回の座談会で出番を増やすって言いましたよね！ それなのに、座談会の次の話ではさらに出番が減り！ 前話にいたっては出番すらないじゃないですか！ー！》

ワルぼう《そうだそうだ！》

コム「あ〜、すみません。作者の腕では君達の出番を増やすのは無理だったようです」

わたぼう《そんな、無責任な》

コム「その代わりと言っては何ですが、これからの座談会の司会役を譲ろうと思っています」

ワルぼう《マジか！？》

コム「マジです。では、今回からですので頑張ってください」

わたぼう《あっ、コムさんって行っちゃいましたね。如何しましよるかワルぼう》

ワルぼう《とりあえず、あいつの言つとおりに仕事をしようぜ》

わたぼう《そうですね。では、今回は前話のデュエルで出てきたオ  
リジナルカードを紹介しますね》

ワルぼう《まずは今回のデュエルで登場した下級通常モンスターの  
紹介だ！》

DQM - グリズリー

通常モンスター / 星4 / 地属性 / 獣族

攻撃力1900 / 守備力800

DQM - ドラゴンキッズ

通常モンスター / 星2 / 炎属性 / ドラゴン族

攻撃力900 / 守備力600

DQM - おおめだま

通常モンスター / 星1 / 地属性 / 悪魔族

攻撃力600 / 守備力500

わたぼう《『DQM - グリズリー』と『DQM - ドラゴンキッズ』  
は『DQM - ストロングアニマル』を召喚するために作ったカード  
で》

ワルぼう《『DQM - おおめだま』は『おたけび』の為に作ったカ  
ードだな。この3枚はこれ以上言う事は無いな》

わたぼう《では、次は今回のデュエルのキーカードたちの紹介です。まずはこれ『DQM・ストロングアニマル』》

DQM・ストロングアニマル

効果モンスター / 星6 / 地属性 / 獣族

攻撃力2300 / 守備力1800

「星降りのほこら」の効果で「DQM・グリズリー」1体と「DQM」と名のつくドラゴン族モンスター1体を墓地に送ることで特殊召喚することができる。

このカードは攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力を500ポイントアップすることができる。この効果を発動して、相手ライフに戦闘ダメージを与えた場合、このカードのコントローラーはその半分のダメージを受ける。この効果は自分のターンに1度しか使用できない。

ワルぼう《結構強いな》

わたぼう《ええ、コムさんも少し強くしすぎたかなと言っていました。しかし、初期設定では攻撃力アップのコストが無かったことに比べればまだましかなとも言っています》

ワルぼう《そりゃいくらなんでも強すぎだろ。まあ、良いか。どうせ責められるのはアイツだし。よし、次はこれだな『いてつく波動』》

いてつく波動

速攻魔法

手札を1枚捨てて発動する。相手フィールド上の表側表示で存在する全ての魔法・罠カードの効果を発動したターンの間無効化する。

わたぼう《DQシリーズのボス戦で苦しめられた特技ですね。コムさんはこれのせいで何度殺されたかわからないと愚痴っていました》

ワルぼう《そうなのか？　しかし、このカードはかなり使えるな》

わたぼう《ええ、これからも出す予定のカードらしいですよ》

ワルぼう《よし、それじゃあ最後のカード『おたけび』の紹介だ》

おたけび

通常魔法

自分フィールド上のモンスターを1体選択する。選択されたモンスターはこのカードが発動したターン攻撃できない。コイントスを1回行い表が出た場合、相手はこのターン魔法・罠カードを発動する事ができない。

わたぼう《おそらく、もう出ないであろうカードだそうですね》

ワルぼう《何でだ？》

わたぼう《運の要素があるカードは基本的に1度しか使用しないそうですね》

ワルぼう《そっか、出す度に当たっていたらおかしいもんな》

わたぼう《ええ、さすがにそれは不自然だろうと言う事です。さて、そろそろ今回の座談会は終わりみたいですね。次は何時でしょうね》

ワルぼう《俺はここより、本編に出たい》

わたぼう《そうですね。まあ、ここの出番をくれただけありがたい  
と思いましょ》

ワルぼう《たしかにな》

わたぼう《それでは次回の座談会まで》

わたぼう・ワルぼう《またね〜(じゃあな〜)》

### 第3話：居る筈のない者達

入学式を終え、竜輝達は自身が行く寮を確認していた。

十代「おお、俺の寮はオシリスレッドだ」

翔「僕もレッドだ」

竜輝「俺もレッドだな」

3人が自身の寮を確認し終えた所、三沢が横を通り過ぎようとしていた。

十代「やあ、2番。お前もレッドか？」

三沢「いや、僕はこの制服でわかるだろう。ライイエローだ」

十代「あつ、制服の色ってそういうことだったのか」

三沢「どうして、君達がレッドなのか不思議だよ」

十代「んっ、なんだか引つかかる言い方だな」

竜輝「まあ、筆記の方がね（しかし、俺と十代がレッドなのは筆記が悪かったからなのか、それともクロノス先生の所為なのか、どっちなんだろうな）」

三沢「まっ、気にしないことだ。失敬するよ、一番君、ワンキル君」

そう言つて、三沢は再び歩き始めた。

十代「あははは。まあ、お前こそ落ち込まずに頑張れよ」

竜輝「（本来なら、落ち込むのは俺達の方なんだけどな）」

三沢「そうそう、君達の寮は向こうだよ」

十代・翔「え？」「」

その後、竜輝達はオシリスレッドの寮に向かい、そこで翔は不満を零したが、十代は逆に気に入っていた。

そして、各自の部屋に向かった。ちなみに竜輝の部屋は十代達の隣だった。

### 第3話・居る筈のない者達

部屋の扉を開けた竜輝はすでに来ていたルームメイトを確認して固まってしまった。

何故なら、そこに居たのは・・・

？「ん、あんたもこの部屋なのか。なら、挨拶しなくちゃな。俺は花菱烈火よろしくな！」

？「俺は衛宮士郎だ。よろしく」

そう、最近原作のキャラしか会っていなかった為、この世界がパラレルワールドということをしつかり忘れていた竜輝だった。

士郎「如何したんだ？」

竜輝「いや、何でもない。俺の名前は天宮竜輝だ。よろしくな」

その後、3人はお互いの事を話している時、誰かが扉を叩いた。

十代「おゝい、竜輝。いるか？」

竜輝「ああ、いるぞ。それと、鍵は開いてるぞ」

竜輝の言葉を聞いた十代は扉を開けた。

十代「なあ、竜輝。これから、散歩に行こうと思うんだがお前はどつする？」

竜輝「別にいいぞ。そうだ、烈火と士郎はどうする？」

烈火「俺は別にいいぞ」

士郎「俺もいいぞ」

竜輝「よし、じゃあ行くか」

その後、竜輝達は外にいた翔と合流し、互いの自己紹介を済ませて、散歩に出た。

翔「はあ〜」

十代「ま〜だ、落ち込んでのか」

士郎「どうしたんだ翔は？」

翔「だって、あんな事を言われたら」

烈火「あんな事って何だ？」

十代「俺達のもう1人のルームメイトに、オシリスレッドは落ちこぼれの集まりだっていわれてな」

士郎「そうなのか？」

竜輝「たしか、オシリスレッドのレッドは、レッドゾーンって言う」

意味だつて誰かに聞いたな」

十代「でも、俺は赤が好きだぜ。燃える炎、熱い血潮。熱血の俺にはお似合いだぜ！」

烈火「そうだよな！ 赤は良いよな！」

竜輝「（そう言えば、この二人って何処となく似ているような）」

十代「大体、まだ何も始まっちゃいない。今からじゃないか」

士郎「そうだな」

翔「そ、そうだよね。そうだ、今から落ち込んで如何するんだ！

頑張れ僕、ファイト」

翔が1人燃えているとき、何かに気づいた十代が校舎の方に走り出した。

翔「始まる前から落ち込むなんてだらしなかつたよ、アニキ」

士郎「十代なら校舎の方に行つたぞ」

翔「えっ!？」

士郎に言われ、校舎の方を見ると十代の背中が見えた。

翔「待つてよ！」

十代「どっかで、デュエルしている奴がいる！」

翔「そんな音、何にも聞こえないよ」

竜輝「気がついたか？」

士郎「いや」

烈火「まあ、行ってみればわかんたろ」

竜輝「そうだな」

そして、竜輝達も十代達を追いかけた。

校舎に入ったら5人は十代の案内の下、歩いていた。

十代「えくと、たしかこっちだよな」

翔「どうして、そんなのが分かるのさ、アニキ」

十代「匂う、匂うぞ。デュエルの匂いだ！」

翔「えっ？ デュエルの匂いって？」

竜輝「デュエルの匂いっていったい何だ？」

士郎「さあ？」

烈火「俺は何となく分かるかも」

竜輝・士郎「えっ!？」

烈火の意外な感覚に驚いていると、十代が近くの部屋に入ってしまった。

翔「あつ、勝手に入っちゃって良いの!？」

竜輝達が十代に続いて部屋に入るとそこはデュエルフィールドだった。

十代「おお、すごい」

翔「うわあ、これ最新設備のデュエルフィールドだよ!」

士郎「本当だ、凄いな」

烈火「さっすが、デュエルアカデミア!」

翔「音響設備も体感システムもニューバージョンだ！ いいなあ、  
こんなところでデュエルやってみたいなあ」

一同がそれぞれ驚いたり感心していると、デュエルフィールドに居た二人組みがこっちに気がついた。

十代「よし、じゃあやろうぜ」

翔「良いのかな？」

烈火「大丈夫だろ。俺達はこの生徒なんだし」

？「というわけにはいかないんだな。これが」

竜輝たちが前を見るとオベリスクブルーの制服を着た二人組み、  
『取巻太陽』と『幕谷雷蔵』が居た。

幕谷「ここは、オシリスレッドのドロップアウトボーイが来る所じやないぞ」

翔「え？」

幕谷「上を見る」

竜輝達は、幕谷が指差した自分達の後方を見た。

そこには、オベリスクの顔がついたレリーフがあった。

取巻「オベリスクの紋章が見えないか？」

翔「ごめん、知らなかったんだ。寮に帰ろう、アニキ」

十代「何かしつくり来ないな。じゃあお前、俺と勝負しないか？  
それなら良いだろ？」

取巻「誰かと思ったら」

幕谷「万丈目さん、クロノス教諭に勝った110番と120番で  
すよ」

すると、観客席のほうから一人の男、『万丈目準』が現れ、竜輝たち  
正確には竜輝と十代を睨んでいた。

十代「ああ俺、遊戯十代よろしく。・・・んで、あいつは？」

十代の言葉に万丈目の表情が険しくなった。

取巻「お前、万丈目さんを知らないのか？ 同じ1年でも中等部か  
らの生え抜き、超エリートクラスのNo.1！」

幕谷「未来のデュエルキングとの呼び声高い、万丈目準様だ！」

十代「おかしいな」

幕谷「何？」

十代「だって、デュエルキングって1番ってことだろ。この学園の1番は俺だからさ」

竜輝「(十代、さっき俺に負けたよねって言わないほうが良いかな?)」

竜輝が入学式の前にやったデュエルのことを思い出して、それを言おうか言つまいか考えていると、十代の言葉に取巻と幕谷が笑い出した。

取巻「ドロップアウト組みのオシリスレッドが身の程知らずな」  
Be Quiet」

取巻が十代の発言に文句を言おうとした時、その言葉を万丈目が止めた。

万丈目「諸君、はしゃぐなよ」

取巻「万丈目さん」

万丈目「そいつらは、お前達よりもやる。入学式試験で手抜きをし

たとは言え、一応あのクロノス教諭を破った男達だ」

十代「実力さ」

竜輝「（俺の場合、そもそも手すら出させなかったんだがな）」

万丈目「ふふん、その実力ここで見せて欲しいもんだな」

十代「いいぜ」

このまま、すぐにでもデュエルを始めそうな空気が流れる中、そこに介入するものが現れた。

？「あなた達、何してるの」

竜輝達の所に4人の少女がやって来た。『天上院明日香』を先頭に『高町なのは』、『フェイト・テストロッサ』、『八神はやて』がやって来た。

翔「わあ、綺麗な人たちだね」

万丈目「やあ、天上院君、高町君、テストロッサ君、八神君。いやあ、この新入り達があまりに世間知らずなんでね。学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

明日香「そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

万丈目「つく、引き上げるぞ」

万丈目はそう言って、取り巻き二人を連れて帰ろうとしたがそれを明日香が呼び止めた。

明日香「万丈目君」

万丈目「なんだい天上院君、僕に何か用があるのかい？」

明日香に呼び止められたのが嬉しいのか、若干声のトーンを高くして万丈目は返事した。

明日香「ええ、アツシユを見なかった？」

万丈目「さあ、今日は見ていないがそれだけかい？」

明日香「ええ、それだけよ」

明日香の用事が期待していたような事でなかったのが残念だったのか、万丈目は少々気落ちしてデュエル場を後にした。

明日香「あなた達、万丈目君達の挑発に乗らないことね。あいつら、  
禄でもない連中なんだから」

明日香は嫌そうな顔を隠そうとはせずにそう言った。

士郎「へえ、お前いいヤツだなあ。俺、お前みたいヤツ好きだよ」

竜輝「士郎、自分の言ってる事をちゃんと理解しているか？」

士郎「？」

士郎の言葉に驚いていた明日香は竜輝のやり取りを見て、クスツと笑った。

はやて「おっ、ようみたらあんたら、クロノス先生を倒した2人やん」

なのは「あっ、本当だ」

フェイト「しかも、片方はワンキルで倒すなんて凄いよね」

竜輝「(まさか、この3人も居るとは・・・)ありがとう、え」と

なのは「あっ、私は高町なのは」

フェイト「私はフェイト・テストロッサ」

はやて「うちは八神はやてや」

明日香「私は天上院明日香よ」

竜輝「俺は天宮竜輝だ。そして、こいつらが」

十代「俺は遊戯十代！ よろしくな！」

翔「僕は丸藤翔です」

烈火「俺は花菱烈火だ！」

士郎「俺は衛宮士郎だ。よろしくな」

明日香「ええ、よろしく。そうだ、あなた達もアッシュって子を見なかった。髪はその翔君の髪と同じような色で、ポニーテールをして紅いバンダナを額に巻いた女の子なんだけど」

十代「俺は知らないな。みんなは？」

そう言っつて十代は、竜輝たちの方を見たが全員首を横に振った。

明日香「そう、全くあの子っいたらいたい何処に行ったのかしら？」

はやて「心配せんでも大丈夫やって、アッシュのことや。きつと何処かで寝てるって」

なのは「にゃははは、否定できないかも」

フェイト「ありえそうだね」

なのはとフェイトは苦笑しながらそう答えた。

明日香「それもそうね。あなた達、もし見かけたら寮に戻るように行ってくれる？」

竜輝「別に良いよ（それにしても、“アツシユ”って誰だ？）」

明日香「それと、そろそろオシリスレッドでも歓迎会が始まるわよ」

十代「そうだ、寮に戻るぞ！」

そう言うやいなや、十代は走り出した。

翔「あつ、待ってよアニキ！」

竜輝「俺達も行くか」

烈火・士郎「ああ（そうだな）」

竜輝たちも十代に続いて、デュエルフィールドを後にした。

はやて「やっぱ、竜輝君かつこええなあ」

なのは「そうだね」

明日香「さて、私達も寮に戻りましょう」

なのは・フェイト・はやて「うん」「」

そして、明日香達もデュエルフィールドを後にした。

本来なら、これではもう誰も居ないはずなのだが、実はもう1人、観客席で横になっているものが居た。

その者、髪は翔の髪と同じ様な色でポニーテールをし、額に紅いバンドナを巻いた少女。明日香たちが探していたアッシュ・アルバードだった。

アッシュ「zzzz・・・」

誰にも気づかれる事もなく寝続ける彼女。さて、彼女が目覚めるのは何時頃なのか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5709i/>

---

遊戯王GX～モンスター・マスター～

2010年10月28日02時56分発行